

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

共起する単語の分析に見る動詞 shut と close の相違

メタデータ	言語: jpn 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2016-09-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 日木, くるみ メールアドレス: 所属: 関西外国語大学
URL	https://doi.org/10.18956/00006339

共起する単語の分析に見る動詞 shut と close の相違

日 木 くるみ

1 はじめに

Tobin (1993) は troublesome pairs としていくつかの類語を取り上げているが、その中の1つに動詞の close と shut がある。事実、2語の違いを定義するのは難しい。例えば Longman Dictionary of Contemporary English (以下LDOCE) では、close を “to shut something so that there is no longer a space or hole, or to become shut in this way” と、shut を “to make something close; to become closed” と記述している。このように close の説明に shut を、shut の説明に close を使うという循環的な説明では2語の使い分けに関して有益な情報が得られるとは言い難い。辞書以外でも close と shut の違いについて説明している先行研究はあるが、以下に詳しく見るようにあいまいであったり、研究者間で意見がわかれる点もあり、学習者がよりどころとするような説明になっているかといえは疑問である。そこで本研究では問題の動詞 close, shut を共起関係という視点からコーパスデータをもとに分析した。

2 先行研究

安井(1979)は close と shut の相違を主に3点から説明している。まず、shut が close と異なるのは「直接押したり引いたりすることによってすき間をなくす」という、直接的に物理的な力が働くことだという。逆に直接的な力が働かない比喩的表現は、自動詞でも他動詞でも close で表され、shut は用いることができないという主張である (The party closed/*shut at nine.; The police closed/*shut the bar because it was selling liquor to the minors.)。

次に、shut と close には視点の違いがあると述べている。close には「閉じて外から見えないように、あるいは、聞こえないようにする」という気持ちが含まれる場合があり、その意味を含んでいる close を用いる場合、視点は部屋の内(「内向的視点」)にあるという。一方 shut の場合、視点は部屋の外(「外向的視点」)だと説明している (closed-door/*shut-door meeting; shut/*close a bird in a cage)。

3点目では、close は進行形の形をとれるが、shut はとれない(John is closing/*shutting the door.)ことや、close は gradually 等の変化の様態を表す副詞と共起できるが、shut は共起できない(The door closed/*shut gradually.)ことから、close は状態の変化を含むが shut は状態の推移ではなく到達された状態に重点がおかれる、と述べている。

Tobin (1993) は troublesome pair とされている類語10組を取り上げ、それら全てを Result, Process という2区分で説明する試みを行っている。彼によれば close は Marked for Result で、shut は Unmarked for Process/Result だと主張する。Marked for Result で意味するのは、“a terminative action, state or event must be viewed from the point of view of a result, goal, consequence, conclusion, destination, telic endpoint, etc. which may be explicitly stated or implicitly implied.”である。一方 Unmarked for Process/Result が意味するのは“a terminative action, state or event may be viewed from the point of view of a PROCESS and/or a RESULT which may be explicitly stated or implicitly implied.”ということである。この説明によれば、Process の視点から解釈される時は shut のみの使用となるが、Result として解釈される時は close も shut も使用し得ることになり、その場合の close, shut は区別されていないように思われる。それに、そもそも Result と Process の区別自体、難しい時があるように思われる。

さらに、Tobin (1993) の説明は安井 (1979) の説明と矛盾していると思われる点がある。Tobin (1993) は close を Marked for Result と分析し、PROCESS (状態の変化) を視点に含まないが、逆に安井 (1979) は状態の変化を含むのが close だと分析している。

次に辞典類を見ると、2語を比較した記述を必ず載せているとは限らないが、close, shut それぞれの特徴と考えられる点が挙げられている。ここではいくつかの辞典で共通して取り上げられていると思われる点を中心に、close, shut のそれぞれについてまとめた。

まず close の意味については、「ゆっくりした動き」(Swan 1995; 政村1989; 田中1987) や、「物と物を合わせる」意味をあげている (スコットフォースマン 1977; ケリー伊藤 1994; W. C. Greet, W. A. Jenkins & A. Schiller 1973; 井上1956)。例えば「ゆっくりした動き」について、Swan (1995) では “We prefer close for slow movements (like flowers closing at night)” のように説明されている。「物と物を合わせる」意味については、close your fist, close the book, to close her jacket などの例と共に「ものの両端、または両側をあわせることも close という」(W. C. Greet et al. 1973) と記述されている。

次に、主語と目的語にくるものとしては、「道路、鉄道、銀行口座など」を挙げている(田中1987; OALD)。

その他、close は shut よりも formal で丁寧であることも記述されている (Swan 1995; OALD; 井上1956; 田中1987)。井上(1956)は close がラテン起源であり、shut に対する雅語だと述べ、田中(1987)は Close your mouth! と Shut your mouth! では「静かにしてください」

と「だまれ」という formality の違いがあると比較している。

一方、shut の意味に関してはただ閉めるだけでなく、「しっかりと、びしっと閉め」、閉じられた状態が堅固で開かれないニュアンスを記述している辞典がいくつかある(スコットフォースマン 1977; ケリー伊藤 1994; W. C. Greet et al. 1973; 斎藤 1980)。OALD ではさらに、“slammed shut, banged shut, snapped shut” という例から見られるように、閉じられる時に音を伴うことを示し、政村(1989)は「閉じ方、動きは一気、瞬間的」だとしている。

shut の主語・目的語については、containers such as boxes, suitcases, etc. (OALD)が来ることが述べられ、ケリー伊藤(1994)は主語に店が来るなら「営業を停止する」、機関なら「本来の活動を停止する」、電気、水なら「流れを止める」という意味になると説明している。

田中(1987)は shut が close より制約が多いとして、1) shut は通例過去分詞として名詞の前に置けないので、代わりに closed を用いなければならない(a closed door)ことと 2) shut は比喩的な意味、例えば「手紙を閉じる」といった場合には用いられないので、代わりに close を用いなければならない(He closed/*shut the letter there.)と述べている。

このように先行研究では、動詞の意味および動詞の主語と目的語などから close と shut を説明している。しかしながら、close, shutが実際どのように使用されているかを分析するというものは少なかったと言ってよいだろう。

3 コーパス分析

3.1 研究課題と方法

研究課題：コーパスを用いて動詞 close と共起する単語と動詞 shut と共起する単語に特徴的な違いがあるかを考察する。

方法：今回使用したコーパスは、Los Angeles Times 1998年の CD-ROM である(以下LAT)。LAT はタグ付のコーパスではなく、手作業による分析が多くなったため、researchable なサイズにする必要があった。また、shut と close の全ての品詞や時制についてここで扱うことは時間的制約などもあり無理なため、一連の研究の手始めとして動詞の shut と close を扱い、さらに時制を過去形の用例に絞ることにした。

shut と closed で検索したところ、LAT の全用例中、closed は6,022例、shut は2,657例であった。しかし、closed, shut とともに同形で過去形と過去分詞形があるため、closed/shut のそれぞれの用例から過去形として使用されているものを出てきた順番に100ずつ選んで、初期分析の対象とした。そこで表れた顕著な特徴及び興味深い点をさらに LAT の全用例から調べるという段階を踏んだ。

選んだ100ずつの用例では自動詞と他動詞の例が混ざっていたが、他動詞は自動詞と違い、

目的語としての名詞を分析する必要があるので、まず自動詞と他動詞に分けた上で(3.2)、自動詞と他動詞ごとに分析し(3.3, 3.4)、最後の分析では初期分析から観察できた興味深い違いに焦点をあてて、さらに LAT の全用例から補足的な分析をした(3.6)。

3.2 自動詞と他動詞の分析

他動詞と自動詞の区別は LDOCE に準拠した。従って shut down のような phrasal verb も目的語を取る場合は他動詞とみなし、目的語を取らない場合は自動詞とみなした。

100例中、shut が自動詞として使用された用例は24例、他動詞として使用された用例は76例で、約1対3の割合で、他動詞として使用されるケースが多かった。closed は49例が自動詞として使用され、51例が他動詞として使用されており、その割合は半々であった。

3.3 自動詞shutとclosedの分析

3.3.1 phrasal verb

自動詞として使用されている shut を見ると、phrasal verb として使われているものが圧倒的に多く、自動詞全24例中22例(91.7%)であった。しかも、phrasal verb の副詞部分は例外なく down で shut down の形で使われていた。shut down の具体的な用例は、“An office supply store shut down for a day...” や “...the naval base shut down...” などである。一方、closed が phrasal verb として使われているのは49例中2例しかなく、その例は closed down (...before it closed down and reopened as a church) と closed off (the city of Thousand Oaks closed off for the practices.) だった。このように shut は phrasal verb で多く使われ、down と高頻度な共起関係を示したが、closed は phrasal verb で使用されることがほとんどなかった。

3.3.2 主語の比較

shut の主語を分析してみると、そのほとんどは a machine, the store, the theater, shops and schools, hospitals, government, the naval base などで、「なんらかの機能をもつ物、場所、団体」としてまとめられる。物理的に「閉まる」意味の shut は1例 (the gates permanently shut) にすぎず、これは「その他」にいった。

一方 closed の主語は、the market, Century shares, ICN's stock といった「株式市場及び株式市場に関連したもの」と、libraries, theater, freeway, school といった「なんらかの機能をもつ場所」にはほとんどが分類できた。「株式市場」は意味的に「なんらかの機能をもつ場所」に含まれると考えられるが、shut の主語としては現れていないことを考慮し、closed 特有の主語としてひとまとめにした。sale, business などのようにどちらでもないものは「その他」に入れた。物理的に「閉まる」意味の closed は1例もなかった。表1にこの結果をまとめた。

主語の特徴		株式市場及び株式市場に関連したもの（企業名など）	何かの機能をもつ物・場所・団体（チーム名）	その他
SHUT (24)	SHUT DOWN	0	95.8% (23/24)	0
	SHUT	0	0	4.2% (1/24)
CLOSED (49)	CLOSED DOWN	0	2.0% (1/49)	0
	CLOSED OFF	0	2.0% (1/49)	0
	CLOSED	63.3% (31/49)	24.5% (12/49)	8.2% (4/49)

表 1: 自動詞 shut, closed と共起する主語

shut と closed の主語比較で 2 語の違いを顕著にしているのは、shut の主語としては 1 つも共起しなかった「株式市場及び株式市場に関連したもの」が closed の主語の約 6 割を占めていた点である。具体的な用例は “...the market closed.” “The stock closed at \$20 on the first day,…” “AOL closed at \$136.63, down \$1.38.” などである。このように closed 特有の主語として「株式市場及び株式市場に関連したもの」を表す名詞が考えられる。

次に顕著な差だと思われるのは、「なんらかの機能をもつ物、場所、団体」という主語が shut では 9 割以上だったのに対し、closed では 3 割弱という点である。この結果からは「何かの機能をもつ物、場所、団体」が shut 特有の主語であるとはいえないが、比較的 shut と結びつき易い主語である可能性を示した。

3.4 他動詞 shut と closed の分析

3.4.1 phrasal verb

表 2 は shut と closed が phrasal verb として使用されている割合を表している。shut の場合、non-phrasal verb として使用されている割合が極めて低く (6.6%)、その他は全て phrasal verb として使用されていた。phrasal verb の内訳は shut down (60.5%), shut out (28.9%), shut off (3.9%) となり、shut down と shut out をあわせるだけでも他動詞 shut 全体の 9 割近い用例を占める。一方 closed は shut と異なり、phrasal verb として使用されているケースは極めて少なく、non-phrasal verb として使用されているケースが 8 割以上であった。

		SHUT (76)	CLOSED (51)
<i>non-phrasal</i>		6.6% (5/76)	86.3% (44/51)
<i>phrasal</i>	+ down	60.5% (46/76)	5.9% (3/51)
	+ out	28.9% (22/76)	5.9% (3/51)
	+ off	3.9% (3/76)	2.0% (1/51)

表2: 他動詞 shut, closed が non-phrasal/phrasal verb で使用される割合と共起する副詞

このように、shut は phrasal verb として使用される頻度が極めて高い一方、closed は、non-phrasal verb として使用される頻度が高い。この結果は3.3.1で見た自動詞と同様の傾向を強く示したといえるだろう。

3.4.2 主語の比較

他動詞 shut の主語にくる名詞を意味によっていくつかのグループに分けた場合、まず politician, employer, I などの「人」で1つのグループにした。次に、自動詞 shut の主語と同様に、the sensor, police, the village, Iraq のように、「何かの機能をもつ物・場所・団体」でひとまとまりにくくった。The Broncos, The Vikings, a USC defense などのようなスポーツチームは「何かの機能をもつ団体」に含めることができるが、後で述べる closed との比較において shut の主語としてのみ使用される主語であったため、「対戦相手」として1つのグループにまとめた。具体的には “a USC defense shut out Notre Dame for the first time...” のような用例である。このグループには Axelrod のような選手名も含まれた。an early freeze, the accident, glitch, a result of impasse などは「天候・事故・故障・難局」としてまとめた。前文をさした this などはどこにも入らないため「その他」に入れた。表3にその分類をまとめた。

主語の特徴	人	主語が何かの機能をもつ物・場所・団体	対戦相手 (チーム・選手など)	天候・事故・故障 難局	その他
SHUT DOWN (46)	11	14	10	11	0
SHUT OUT (22)	1	0	20	0	1
SHUT OFF (3)	0	3	0	0	0
SHUT (5)	2	3	0	0	0
合計 (76)	14	20	30	11	1

表3: 他動詞 shut と共起する主語

他動詞 closed は、「人」(authorities, he)、「何かの機能をもつ場所・団体」(the school, the

State, Buena)、「天候・事故・難局」(snow and ice, the crash)、「その他」(the ordinance, goal, location) に分類し表4にまとめた。ここで Buena のようなチーム名(3例)を「何かの機能をもつ場所・団体」に含め、「対戦相手」として別に分類しなかったのは“Buena ... closed out the scoring ...”のような文脈で現れ、「対戦相手」の意味ではなかった為である。

主語の特徴	人	主語が何かの機能をもつ場所・団体	天候・事故・難局	その他
CLOSED DOWN (3)	0	2	1	0
CLOSED OUT (3)	2	1	0	0
CLOSED OFF (1)	0	1	0	0
CLOSED (44)	18	16	5	5
合計 (51)	20	20	6	5

表4: 他動詞 closed と共起する主語

表3と表4の比較で最も特徴的なのは、shutの主語として高頻度で共起している「対戦相手」が closedの主語としては1例もないという点であろう。「対戦相手」は shut 特有の主語と考えてよいのかもしれない。

その他の点ではどちらの動詞も「人」・「何かの機能をもつ場所・団体」・「天候、事故・難局」を主語にとり、特に顕著な差として述べるべき点はないように思われる。以下、shut, closed 共に似た主語をとる具体例を挙げてみた。

人が主語の場合：

... your employer *shut* down its operations...

He *closed* his eyes for a second...

何かの機能をもつ場所や団体が主語の場合：

police *shut* down the offices....

Police *closed* one lane of Topanga Canyon Boulevard..

天候、事故、難局が主語の場合：

The accident *shut* down the freeway for several hours,..

The accident *closed* down several lanes of the freeway.

3.4.3 目的語の比較

まず shut の phrasal verb/non-phrasal verb がとる目的語を見ると、大まかに5つに分けられるようである。a room, doors などの「物理的に閉じるもの」、the computer, universities, freeway, government のような「何かの機能をもつ物・場所(道や鉄道を含む)・団体」、operations などの「何か機能を持つ作戦」、the Chargers, the Dukes のような「スポーツの対戦相手

(対戦チーム、対戦チームの選手など)」の4つと、「その他」に含めた business, the work のようにどこにも属さないグループの1つである。表5はその分類をまとめたものである。

目的語	物理的に閉 じるもの	何かの機能をも つ物・場所・ 団体	何か機能をもつ 作戦	対戦相手 (チーム)	その他
SHUT DOWN (46)	0	29	4	9	4
SHUT OUT (22)	0	0	0	21	1
SHUT OFF (3)	0	1	0	0	2
SHUT (5)	3	1	0	0	1
合計(76)	3	31	4	30	8

表5: 他動詞 shut の目的語

shut down の目的語である「何かの機能をもつ物・場所(道や鉄道を含む)・団体」(29例)と「何か機能を持つ作戦」(4例)を「何か機能をもつ対象」としてまとめると、33例になり、他動詞 shut 全76例の約5割弱(47.4%)を占め、「何か機能をもつ対象」と shut down の比較的強い共起関係が窺える。shut out の取る目的語は22例中21例が the Dukes のようなスポーツにおける対戦相手であり、スポーツに関係のない目的語は most Western influence の1例のみだった。このことから shut out と「スポーツにおける対戦相手」の共起関係が強いことが推察される。例の数が少ないため推測の域を越えないが、shut down の最多目的語と shut out の最多目的語は重なっていないことから考えると、phrasal verb の意味的違いが共起し易い目的語の違いとなって表れているのかもしれない。shut off の目的語は access, pacemakers, the easy capital の3つのみと少なく、目的語の特徴はまとめにくい。また、shut の典型的な意味と思われる「物理的に閉鎖する対象」が目的語に来たのは shut + Noun 形の3例(door 2例と room 1例)のみだったのは興味深い。

次に他動詞 closed の目的語を分類すると、his eyes, the door などの「物理的に閉じるもの」、offices, road のような「何かの機能をもつ場所(道や鉄道を含む)・団体」、Indianapolis, the game, the first half, the scoring のような「スポーツの対戦相手・ゲームやゲームの1部分」、escrow のようにどこにも属さないと思われる「その他」の4つにまとめられる(表6)。

目的語	物理的に閉じるもの	何かの機能をもつ場所 (道や鉄道を含む)・ 団体	スポーツの対戦相手・ ゲームやゲームの1部 分(前半戦など)	その他
CLOSED DOWN (3)	0	3	0	0
CLOSED OUT (3)	0	0	3	0
CLOSED OFF (1)	0	1	0	0
CLOSED (44)	11	22	4	7
合計(51)	11	26	7	7

表6: 他動詞 closed の目的語

closed は3.4.1で述べたように phrasal verb として使用される率が極めて低い(13.7%, 51例中7例)ため、phrasal verb の目的語の傾向をまとめることができない。non-phrasal verb の目的語で一番多かったのは「何かの機能をもつ場所(道や鉄道を含む)」で、これが closed とよく共起する目的語といえる。次に多かったのは「物理的に閉じるもの」だったが、closed 全51例に占める割合は21.6% (51例中11例)に過ぎなかった。

他動詞 closed、shut の分析結果をまとめると、shut は phrasal verb で使用されることが多く、その中でも shut と down の共起が高頻度だった。主語で高頻度に共起したのは「対戦相手」であり、目的語と phrasal verb の共起関係でみると、「何か機能をもつ物・場所・団体・作戦」と shut down, 「スポーツにおける対戦相手」と shut out が高頻度だった。一方、closed は non-phrasal verb で使用されることが多く、「何か機能をもつ場所」という目的語と高頻度の共起関係を示した。

3.5 まとめ

自動詞と他動詞の分析から特徴的な shut と closed の違いを総体的にまとめると、以下のようないえる。

- 1) shut は自動詞でも他動詞でもほとんどの場合 phrasal verb (特に shut down の形) で使用されていたが、closed は自動詞、他動詞を問わず phrasal verb で使用されることはほとんどなかった。
- 2) 自動詞 closed の最多主語は「株式市場とその関連」のように特殊な場所であり、shut がこれを主語にとることはなかった。
- 3) 他動詞 shut の最多主語は「対戦相手」であり、closed がこれを主語にとることはなかった。
- 4) 他動詞 shut down は「何か機能をもつ物・場所・団体・作戦」という目的語と高頻度で共起したが、他動詞 closed down はそれ自体極めて低い使用頻度だった。
- 5) 他動詞 shut out は「対戦相手」という目的語と高頻度で共起したが、他動詞 closed out はそれ自体極めて低い使用頻度だった。しかも、closed out の目的語の多くは「ゲームの1部分」を意味するものだった。

以上の相違点をまとめたものが表7である。

	自動詞		他動詞	
	phrasal verb	最多の主語	phrasal verb	最多の目的語
SHUT	高頻度 (shut down 最多)	対戦相手	高頻度 (shut down 最多、 shut out は次に最 多)	1. shut down の最多目的語 は何かの機能を持つ物・場 所・団体・作戦 2. shut out の最多目的語は 対戦相手
CLOSED	低頻度 (closed down 低頻 度)	株式市場とその関連	低頻度 (closed down 低頻 度、closed out も低 頻度)	closed の最多目的語は 何かの機能を持つ場所・団 体

表7: 自動詞・他動詞の分析から見た shut と closed の特徴的な違い

3.6 Los Angeles Times 1998年の全用例からの補足分析

今までの分析で見たように、2語の違いを特徴付けるのは phrasal verb としての使用頻度差とそれぞれの動詞と共に起る名詞（主語・目的語）の違い、の2点に集約されそうだ。しかしこの結果は限られた数のデータからのものであるため、データに偏りがある可能性は否定できない。このセクションでは、さらに LAT の全用例からも同じようなことがいえるか確かめてみた。

3.6.1 phrasal verb の補足分析

3.6.1.1 shut down と closed down 比較

まず、自動詞・他動詞どちらの shut でも最も高い使用頻度だった shut down は LAT の全用例でも高頻度に使用されているか検索した。この検索では自動詞 shut down と他動詞の shut down + NP、shut + NP + down を含めた。shut down の形であらわれるものには過去形ばかりでなく、現在形、過去分詞形などが含まれるが、手作業で過去形のみを選び出すのが困難なため、shut down で検索される全ての用例を対象とした。

結果は shut の全2,657用例中1,523例、つまり shut 全体の57.3%にあたる割合で shut down が表れた。これは米語の新聞英語では shut が shut down の形で使用されることが多い可能性を示唆していると思われる。closed down についても同様に調べたところ、全6,022例中133例にとどまり、これは closed 全体の2.2%にしかすぎなかった。

3.6.1.2 shut out と closed out 比較

OALD と LDOCE のどちらにも記載されているように、shut out と closed out には他動詞用法のみ存在する。他動詞 shut out と他動詞 closed out を比較して興味深いのはそれぞれがとる目的語の内容である。shut out, closed out は共にスポーツのゲーム（試合）に関連した目的語

を取るが、shut out の目的語は対戦相手がほとんどなのに対し、closed out の目的語にはゲームそのものや、得点に来るといった特徴があるようだ。そこで、shut out + NP, shut + NP + out, closed out + NP, closed + NP + out を LAT 全用例で調べた。

shut 全2,657例中 shut out は382例で、shut 用例全体に占める割合は14.9%だった。このうち受動態が202例、目的語をとる例は180例で、180例中142例(78.9%)の目的語が対戦相手だった。また、目的語ではないがよく共起するものに回数(Louis was shut out twice ...) や決められた時間を表す前置詞句(the Falcons shut out the Moors in the third quarter ...) がきた。

closed out は closed 全6,022例中わずかに111例で closed 用例全体に占める割合は1.8%だった。closed out の目的語で「対戦相手」はわずかに9例のみで、another winning week, the final session, the half, the match, the scoring のような「決められた時間や期間に関するもの」が53例(全 closed out 用例の47.7%)、または得点(12例)などがきている。shut out も回数や期間が来るが、closed out の例と比べてみると興味深い違いが明らかになる。

Tough Gardner was shut out in the first half,.....

...as Massachusetts closed out the first half with a 14-3 run...

上の文ではいずれも the first half という試合の中の決められた時間を表す名詞句があるが、shut out の場合は前置詞句(in the first half)となり、closed out の場合は目的語(the first half)となる。つまり、shut は誰を打ち負かすかに焦点があてられ、closed out は決められた時間に行われること(the half, the match) や期間を終えることに焦点が当てられると考えられる。ちなみに OALD と LDOCE で shut out の記述をみると、OALD には記述がないものの、LDOCE では米語特有の使い方として“to defeat an opposing team and prevent them from getting any points”と載っている。LATが米語の新聞であるということを考えると、誰を打ち負かすかに焦点があてられている shut out がよく使用されているのは納得がいく。closed out についてはどちらの辞典も American English だと説明しているが、OALD には(1) to sell goods very cheaply in order to get rid of them quickly related noun CLOSEOUT と、(2) to finish or settle sth. の2つの意味が載っていたが、LAT のデータでは2番目の意味の方が多く使用されていた。American English では [shut out + 対戦相手]、[closed out + 決められた時間に行われることや期間] という対応関係があるのかもしれない。

3.6.2 non-phrasal verb の補足分析:自動詞の主語と他動詞の目的語

3.6.2.1 自動詞 shut と closed の主語比較

初期データの分析では自動詞 closed の主語は「株式市場とその関連」がとりわけ多かった。そこで、自動詞 closed と共起していた market(s), stock(s), share(s) が LAT 全用例でも closed の主語として現われているか調べた。結果は market(s) を主語にとるものが161例、

stock(s) では321例、share(s) では166例あった。一方、自動詞 shut の場合、主語に「株式市場とその関連」が来るのは1例もなかったが、LAT 全用例で調べると主語に market(s) が来るものは2例 (the market would be shut off; markets are being shut), stock(s) が来るものは1例 (the stock exchange shut down ...), share(s) にいたっては全くないといった対照的な結果になった。これらの結果から shut が「株式市場とその関連」を主語にとることはあっても、極めて稀なことととらえてよいだろうし、「株式市場とその関連」は自動詞 closed の特有な主語と言えるかもしれない。

3.6.2.2 他動詞 shut と closed の目的語比較

前述したように closed は他動詞用法の86.3%で closed + NP の形を取るが、shut は6.6%しか shut + NP の形を取らない。shut の例は僅かしかないが、closed + NP/shut + NP でそれぞれの名詞を比較するといくらかの相違点があった。それは、eyes が closed とは共起したが、shut とは共起しなかった点と、room が shut とは共起したが、closed とは共起しなかった点である。

先行研究では close の特徴の1つとして、「ものの両端、または両側をあわせることも close という」(W. C. Greet, et al. 1973) と説明している。これが close 特有の使われ方であれば、「両端、または両側をあわせる」ことができる、zipper, book, mouth, eyes などには shut ではなく、closed が使われるということになる。そこで LAT で shut や close の目的語として zipper(s), book(s), mouth(s), eyes が来るかどうかを調べた。表8にその結果を示した。

	eyes	mouth	zipper	book
SHUT	10	8	0	1
CLOSED	56	1	0	5

表8: 他動詞 shut, closed と4つの名詞(目的語)との共起頻度

closed が eyes を目的語にとるケースが56例で、多いように見えるが、closed の全6,022例に占める割合は0.9%にすぎなかった。また shut では、数は極めて少ないものの、eyes, mouth, book などが目的語に来ている。このデータに関する限り、「ものの両端、または両側をあわせること」が close 独自の使い方だと言えないように思われる。

shut の特徴について OALD では “Shut is also usually used for containers such as boxes, suitcases, etc.” と述べている。これが shut 特有の使われ方であれば、room, boxes, suitcases には closed ではなく、shut が使われることになると考え、LAT 全用例で shut や closed の目的語として room(s), box(es), suitcase(s) が来るかどうかを調べた (表9)。

	room(s)	box(es)	suitcase(s)
SHUT	2	0	0
CLOSED	10	0	0

表9: 他動詞 shut, closed と3つの名詞(目的語)の共起頻度

closed と同様、shut の場合もあまりにも用例が少なく一般化は到底できないが、shut, closed も共に room をとることから考えて shut が container に使用されることが shut 独自の使い方だとはいえないようだ。

4 おわりに

従来の類語研究では共起する単語の頻度分析が少なく、よく使われる用法とはどのようなものかについては情報があまり得られない。使用頻度の高い用例やその特徴は学習者にとって有益な情報であるにもかかわらず、辞書・参考書などから単語の意味やいくつかの用例などを知ることではできても、実際に使用頻度の高い用例やその特徴などに関する情報を得ることができるとは言い難い。そこでこの研究では、英語学習者にとって使い分けが難しいとされる類語の1つである close/shut が過去形として使用される用例に絞り、米語コーパス (Los Angeles Times, 1998年版) の用例を使用頻度の観点から分析した。

分析の結果、2語の間には少なくとも高頻度で使用される用法についていくつかの特徴的な差異が観察された。自動詞 closed の6割以上は株式市場及びそれに関連した主語をとり、動詞の後には値段、時間、期間などがきた。一方自動詞 shut では shut down の形で使用されるケースが9割を超え、対戦相手を主語に取る傾向があった。

他動詞の用法でも shut が down や out と結びついて使用される場合が約9割を占めた。特に shut out では[対戦相手(主語) + shut out + 対戦相手(目的語)]の形がほとんどだった。他動詞 closed は down や out をとることは極めて少なく、9割弱の用例で[closed + Noun]の形をとった。また、American English の用法であるが、phrasal verb として使用される shut out と closed out の目的語は前者の場合は対戦相手、後者の場合は決められた時間に行われることや期間という内容の違いによって使い分けている可能性を示唆した。

今回使用したコーパスはサイズが小さく、新聞英語という特有なジャンルであったが、そのようなコーパスからも closed と shut はかなり特徴的に使用されているということがわかった。高頻度な使われ方、つまり、学習者が覚えておくべき単語の使われ方を知る上でコーパス分析が英語教育に示唆するところは大きいと思われる。

但し、今回見られた傾向が米語の新聞英語に限られた傾向なのか、それともジャンルを超えた一般的な傾向といえるのかどうかについては今後さらに検討をしていかななくてはならない。

ジャンルによって高頻度な使われ方が違うとしたら、それもまた学習者が知っておくべき語彙情報となろう。又、この研究では close と shut の単純過去に絞ったが、未来形・現在形・進行形ではどうなのか、また形容詞や名詞として使用される場合はどうなのかなど今後の課題は多い。

References

- Greet, W. C., Jenkins, W. A. and Schiller, A. *In Other Words*. Sanseido, 1973
- Swan, Michael. *Practical English Usage*. London: Oxford University Press, 1995.
- Tobin, Yishai. *Aspects in the English Verb*. New York: Longman, 1993.
- 安井泉 「「とじる」「しめる」と close, shut」『英語学論説資料』13-1, 1979, 197-204.
- ケリー伊藤 『辞書ではわからない英単語の使い方事典』 三修社, 1994.
- 井上義昌 『英語類語辞典』 開拓社, 1956.
- 宮内秀雄, R. C. ゴリス訳編 『スコットフォースマン英語類語辞典』秀文インターナショナル, 1977.
- 斎藤祐蔵 『英語類義語辞典』 大修館, 1980.
- 政村秀實 『図解英語基本語義辞典』 桐原書店, 1989.
- 田中実編 『基礎英語類語辞典』 北星堂, 1987.
- Longman Dictionary of Contemporary English*, 3rd Edition. Harlow: Longman, 1995.
- Oxford Advanced Learners Dictionary of Current English*, 6th Edition. Oxford:Oxford University Press.